

梅雨時の長雨と低温・日照不足下における管理対策について

農業総合センター
専門技術指導員室

関東甲信地方では、気温が低く、日照不足の日が続いています。気象庁から、7月14日頃からかなりの低温になる予報も出ていますので、農作物の管理に当たっては、次の技術を守ってください。

I 普通作

1 水稲

- (1) 幼穂を低温から保護するため、水管理が可能な水田では、深水管理を行う。
- (2) 置き苗は、いもち病の発生源となるため、直ちに本田から除去する。
- (3) いもち病の発生が認められた場合は、速やかに防除を実施する。

2 大豆

- (1) 大豆播種前には、圃場の明きょ・暗渠・弾丸暗渠、硬盤破碎等により、圃場の排水性を確保する。また、排水路の清掃・補修を行う。
- (2) これから播種作業をする場合は、晩播となるため、播種量を増やして狭畦密植栽培とし、苗立ち数の確保に努める。
- (3) 大豆播種後は、圃場の明きょと排水口との接続を確保し、圃場表面水の速やかな排水に努める。また、暗渠は全開にし、稼働状況を点検する。
- (4) 湿害を受けやすい圃場では耕うん同時畝立て播種技術を導入する。
- (5) 大豆播種後の圃場浸水により茎疫病等の発生が懸念されるため、防除対策に努める。

II 野菜

梅雨の多雨、寡日照により、品目や生育ステージにもよるが、①土壌水分過多によって根の機能が低下し、草勢の低下や立枯れを起こす、②日照が不足して光合成が充分行なわれなくなり、草勢の低下、生育の遅延をきたす、③高湿度や草勢の低下により灰色かび病やべと病、疫病、さび病等病害の発生が増える、等の影響が懸念される。

1 野菜全般

- (1) 圃場周囲に明渠を掘るなど、圃場の排水に努める。
- (2) 茎葉が軟弱徒長しやすいことから、施肥は控えめとし、灌水も天候を見ながら加減して過湿を避ける。
- (3) 果菜類では、着果過多を避けるとともに、整枝せん定を励行して、株の充実を図る。
- (4) 抑制作型の野菜の苗床では、苗（ポット）の間隔を充分に取る。
- (5) 軟弱な生育をしているときに、急に晴れて高温強日射に曝されると、激しい萎れを起

こすことがあるので、すぐに遮光を行なえるよう準備しておく。

- (6) 病害虫の発生が多くなるので、適宜下葉かきを励行し、発生初期からの防除を徹底する。
- (7) 連続した降雨が予想されている場合は、雨の合間を縫って防除を実施する。
- (8) 薬剤散布を行なう際、軟弱な生育をしている場合は薬害を生じやすいので、登録の範囲内で散布濃度を低めにする等の配慮をする。

2 施設野菜

- (1) 施設内で湿度の高い空気が滞留しないよう、換気に努め、可能な場合は循環扇も利用する。

3 露地野菜

- (1) 地下水位が高いほ場や排水性が悪いほ場では高畦とし、可能な場合は全面マルチ栽培とする。
- (2) 肥料の流亡が多い場合は追肥を行うが、過剰になると軟弱な生育となるので、必要最小限とする。また土壌水分が多いうちに作業すると、土壌を固結させたり、茎葉や根を損傷して病害発生を助長するので、水がはけた後に行なう。

III 果 樹

- (1) 曇雨天が続くので、病害の発生に注意を払い、病害虫参考防除例に準じて、雨の合間を縫って確実に防除を行う。また、病害虫発生予察情報を参考に病害虫の発生、被害防止に努める。薬剤散布を行う際、軟弱な生育をしている場合は薬害を生じやすいので、登録の範囲内で散布濃度を低めにする等の配慮をする。
- (2) 着果過多は、小玉や着色不良など品質低下を招くので、樹勢に見合った適正着果量を確保し、適正な樹相の維持に努める。
- (3) 良好な受光状態の維持のため、枝葉が混み合うような場合は、誘引、摘心など新梢管理が重要である。ただし、極端な新梢管理（枝葉の切除を伴うもの）は、樹勢低下につながる恐れがあるため避ける。
- (4) 多雨により湛水した場合には、速やかに溝掘りして園外へ排水する。

IV 花 き

梅雨の長雨により、日照時間が不足すると、品目や生育ステージにもよるが、①軟弱徒長による生育不良、品質の低下、②根腐れによる立枯れ症状の発生、③灰色かび病やべと病、さび病等病害の発生、④花芽分化・開花の遅れによる需要期・計画出荷への影響等が懸念される。

1 花き全般

- (1) 茎葉が軟弱徒長になりやすいことから、施肥量に留意するとともに（多肥は控える）、灌水も控えめとする。
- (2) 日長により花芽分化や開花に影響が大きい品目では、花芽分化の状況を確認するとともに、開花調節（キクの電照等）を行っている場合は、品目・品種に合わせた管理・調整（消灯時期の調整）を徹底する。
- (3) 病害の発生が多くなるので、発生状況を観察し、防除を徹底する。連続した降雨が予想されている場合は、雨の合間を縫って防除を実施する。

(4) 薬剤散布を行う際、軟弱な生育をしている場合は薬害を生じやすいので、登録の範囲内で散布濃度を低めにする等の配慮をする。

2 施設花き

(1) 長雨が続く場合、施設内への雨水流入や地下水位の上昇を防ぐため、周囲に暗渠や明渠を設け、排水対策を行う。

(2) 多湿条件になると病害が多発するため、ハウス内が過湿にならないように、換気を十分に行う（可能な場合は循環扇の利用）。

3 露地花き

(1) 排水対策として、ほ場周囲に暗渠、明渠を設置し、ほ場内に雨水が停滞したり、冠水しないように注意する。地下水位が高いほ場や排水性が悪いほ場では、高畦栽培が効果的である。

(2) 湿害により、根の活性が低下すると、生育・品質に影響が出るので、状況に合わせて葉面散布を実施し、生育・樹勢の回復を図るとともに、肥料の流亡が多い場合は、追肥を行うとともに、適宜防除を行う。

(3) 長雨・低日照後の強日射は、株の萎凋や葉焼けの発生が懸念されるので（特にグラジオオラス）、寒冷紗等による遮光の準備をしておく。

V 畜産

梅雨は高温多湿や細菌等の影響により、家畜のストレス増加による生産性の低下をまねきやすいため、畜舎の通風を確保するとともに衛生的な飼養管理に努める。

1 畜舎の通風と乾燥を確保

畜舎内の通風を確保することで、湿った空気や空気よどみの改善に努める。また、畜舎消毒を実施する際は、効果が発揮できるよう畜舎清掃作業後に実施する。

乳牛の場合、汚れた敷料に加え高温多湿な条件は細菌の増殖に好都合となり、乳房炎を誘発し、生乳中の体細胞数の増加につながる。こまめな除ふん作業の実施及び清潔な敷料を確保し、乾いた牛床及び清潔な牛体を保つ。

2 カビを発生させないための飼養管理の注意点

飼料保管庫及び飼料タンクの清掃・乾燥を十分に行い、カビ発生等による飼料の変敗に注意する。

(1) 日中に暖められるとタンク内が結露するため、飼料タンクを遮光するか防曇塗料を塗り、ひび割れ、結露、飼料の変敗等がないかこまめに確認する。紙袋飼料は冷暗所で保管する。

(2) 飼料は適量を補充し、必要以上に長期間タンクで保存しない。

(3) 飼槽の残飼、エサ箱にこびりついたエサはこまめに取り除いて、衛生管理に注意する。